

## 知られざる海の事件簿

## ニッポン 海事秘録

写真(特記以外)と文/平間洋一(元海将補)



波を切って快走する「ちとせ」DE220。「ちくご」型護衛艦の6番艦であり、1999年に除籍となった



「ちとせ」の露天艦橋に仁王立ちになって指揮を執る平間艦長(中央)

## 冷戦下の極東

現在では中国海軍の方が存在感があるかもしれないが、かつてのソ連海軍こそ、日本にとって最大の脅威だった。当時米国はベトナム戦争に深入りしており、多大の軍事費を浪費している間に、ソ連海軍はD型潜水艦、クレスタ級巡洋艦、モスクワ級対潜空母、カーラ級巡洋艦、キエフ級空母を戦列に加えるなど、新型艦艇を続々と進水・就役させ、海軍力を飛躍的に増大させていたのである。米国は1973(昭和48)年に北ベトナムとの和平協定に調印し、ベトナムから撤退中であり、1975(昭和50)年4月には南ベトナムの首都サイゴンが北ベトナムの手に落ち、同時にラオス、カンボジアでも共産主義勢力が政権を獲得、インドシナ半島は完全に赤化されていた。

一方、日本海では1968(昭和43)年に米海軍の情報収集艦プエブロが、北朝鮮警備艇に領海侵犯を理由に攻撃を受け、1名が死亡し82名が艦ごと拿捕されるという事件もあった。プエブロは自沈せず、機密度の高い電子情報収集機材などを押収され非難を受けた。

米国はソ連を牽制しようと、1971(昭和46)年にニクソン大統領が中国を電撃訪問し、東アジアにおける冷戦の基軸の一つであった米中関係を改善する。翌72(昭和47)年には日本が中

国と国交を正常化した。

米中が接近すると、ソ連は急速にベトナムに接近し、軍事・経済援助を与えてカムラン湾の使用権を得た。また、ソマリア、エチオピア、アンゴラ、ソマリアに軍事援助を与え、港湾施設と燃料タンクなどを建設し、インド洋に長期間にわたり艦隊を展開するなど、戦略核削減軍縮交渉こそ開始されていたが、新しい冷戦が始まっていた。今回紹介するのは、そんな時代に経験したある航海の回想である。

## 択捉海峡を縦断せよ

1974(昭和49)年の初夏、私はネオンまぶしい「六本木刑務所(海上幕僚監部の俗称)」から、大湊に着任した。冬ともなれば積雪50cm、レーダーを回すと氷柱が落下するので、「レーダーを回す。頭上に注意!!」とマイクをかけてレーダーを試験し、甲板上の雪かきを行ってから出港するという雪深い土地だ。

この大湊を母港とする「ちとせ」艦長を拝命してから3ヶ月が過ぎた9月のことである。個艦訓練で1週間ほどの艦長所定の単独行動が許された。

前年のモスクワにおける日ソ首脳会談で、田中角栄総理(当時)は北方領

土の返還を強く主張したが、ソ連側から何ら明確な回答を得られなかったことがあった。このとき、海上自衛隊も総理の訪ソに合わせ、北方四島はわが国の領土であるという意思表示の一つとして、護衛艦に択捉海峡を縦断させるべきであると、調査部長から政務次官、内局の防衛局長段階まで進言していた。

艦長着任前、海幕調査部のソ連首席担当者として、このブリーフィング資料を作成した私は、この個艦訓練の機会に北方4島が日本領土であることを国内外に“Show the Flag”したいと考えた。大湊から択捉海峡を通り、時計回りに北海道を一周するのである。もしこれが問題ならば、根室海峡の日本の領海内を通峡したい。



雪の積もった「ちとせ」のアスロックランチャー。北の海では過酷な環境とも戦わなければならなかった

第2回

## 冷戦下最前線の実情 北海道一周択捉海峡縦走計画

日本の北方領土を占拠し、大きな脅威であったかつての超大国ソビエト連邦。ソ連と対峙する北の海は東西冷戦の最前線として現在とは比較にならない緊張感に包まれていた。今回はこの海でソ連艦と対峙した艦長が立案した知られざる航海計画の顛末をご紹介します。

それも駄目ならば択捉島沖までオホーツク海を東航し、網走まで行きたいとの個艦訓練計画を提出し、第1案で了承を得た。

### 決意の出港

オホーツク海に入ればソ連艦艇が追尾して来るであろう。どのような展開になるのか、あらゆる不慮の事態に備えて準備した。国際海洋法から戦時国際法の臨検や拿捕、国際海上衝突予防法、国際信号書、米ソ間で同意した「監視行動時の行動規範」「同信号書」などに当たった。

乗員には千島列島の歴史、1893(明治26)年に郡司成忠大尉が品川からカッターで択捉島に上陸し、日本の領土である実績を示したこと、帝国海軍が華やかかなりし頃は、二等駆逐艦1隻の軍艦旗でソ連の漁業監視船が姿を消していた歴史などを話した。また、南千島や樺太周辺の漁業資源や、この海域で終戦以来1973年までに1,424隻、漁民1万2,008名が拿捕され、525隻、漁民20名が未帰還であることなどを話し、択捉海峡縦断の意義を教育した。

さらに「プエブロ号のように無抵抗で拿捕されるのは、海上自衛隊として日本として不名誉なことなので抵抗する。ソ連艦が砲を向けてきたら、こちらも向ける。発砲したときには、こちらも発砲するので、砲側弾薬箱に実弾を準備せよ」などと指示した。

しかし、実際には機関長に「砲は撃たない。撃てない」ので、もし拿捕されそうになったら機関室のキングston弁を開いて自沈する。乗員には判らないように準備しておけと指示した。私は「日本の固有領土であると口先や、文書でいくら主張しても領土は返ってこない。『ちとせ』が万一抵抗せずに拿捕された時には、私が船と運命を共にすれば、国民も北方四島の重要性、海上防衛力強化の必要性を強く理解するであろう」と覚

悟し、副長に「私が死んだらこの文書を新聞社に届けろ。海上自衛隊に提出しても、ことなかれの内局の文民公家に文民統制とやらで握り潰されるからな」とまで指示した。

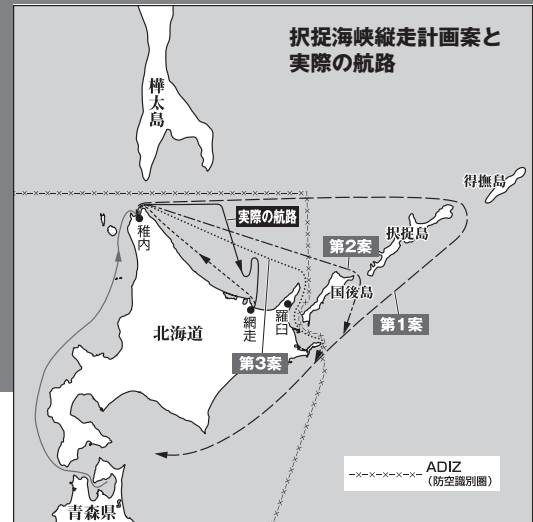
### 不本意な反転

1974(昭和49)年9月5日、「ちとせ」は大湊を出港し、6日に稚内に入港、稚内の監視所などから最近のロシア海軍の動きなどの情報を得た。7日に稚内港を出港すると、早速T-43型掃海艇が出迎えにきた。速力を上げると大波をかぶり、悪戦苦闘しながら追尾してきたが、これは速力を上げて振り切った。

しかし、その直後のことである。「国会開催中なので社会党が騒ぎ出し、政府を窮地に追い込むだろう。通峡は見合わせよ」と、最も怖れていた命令を受けてしまった。それならば択捉北端まで行こうと東航していたところ、今度はリガ型フリゲイトが現れ、300mから100mの距離をとって並行し随伴してくる。

このリガ型はトン数こそ1416tであるが、100mm単装砲3門、37mm機銃2基、25mm機銃2基、3連装対潜ロケット砲という重装備だ。一方の「ちとせ」は1,470tでトン数は同じだが、武装は3インチ砲1基、40mm連装機関砲1基、アスロック8連装1基、短魚雷2基、しかも建艦費が不足したため、40mm機関砲は米海軍が第二次世界大戦時に上陸用舟艇LSに付けていた代物で、それを剥がし取ってきて装備したりサイクル品である。ソ連駆逐艦の重武装には圧倒された。

しかし、相手が砲を向ければ、こちらも向けるぞと待ちかまえていたが、よく見ると砲員も付けず、武器覆いのキャンバスも付けたまま。そこで私は対応を一八〇度変更し、発光信号で“Good After Noon”と挨拶したが応答なし。モールス



信号は判らないのかと今度は手旗信号、次いで旗流信号で挨拶を送り続けたがやはり応答なしだった。針路を東に、択捉へ行くぞと意地を張っていたが、そろそろ針路を南に変えないと、釧路の入港時刻に間に合わなくなってきたので針路を南に向ける。その後、1時間ほど追尾してきたが、安心したのか反転し、ソ連艦は夕闇の中に消えた。

南下して北海道沿岸に近づくと、前方に小さな光が転々と続いており、流し網が前面に浮いている。しかもどこが網の端なのか分からない。そのうちに漁船が数隻近づいてきた。護衛艦だと判ると被害があろうがなかりすが、網を切られた、魚が逃げたと、網代と損害賠償を請求され、切ってもいないのに漁網切断事故報告を書かなければならない。

このソ連の軍艦より怖ろしい日本の漁船には、逃げるが勝ちとソ連艦が消えた北に走り、漁船から逃げた。これなら網を切られても、ソ連の軍艦に切られたと思うだろうというわけだ。漁船がレーダーから消えたので、反転して網走に入港したが、また、北海道を一回りして大湊に帰らなければならない。夕刻には出港である。

択捉海峡も歯舞海峡も通過できず、乗員に半舷上陸しかさせられなかった私は、郡司大尉の勇氣と意気に比べ、2佐にもなり、冷暖房完備の鉄の船に乗りながら、網走から反転せざるを得なかった自己の無力と、昭和元禄の時代風潮を苦々しく思いながら、次の一句をものにして鬱憤を晴らした。

最果ての 岬に立ちて 想うのは  
奪い取られし 北の島々



当時北方に配備された海自艦がしばしば顔を合わせたソ連のT-43型掃海艇。小さな船体でよく動き回っていた (Photo/USN)



約70隻もの同型艦が建造され、ソ連の同盟国にも供与されたリガ型フリゲイト。リガ型はNATOコードネームである (Photo/USN)